兵庫県・私立
日生学園第三高校

基礎学力の定着

不登校経験者への手厚い学習指導と行事で社会で生き抜く力を養う

◎「太陽のように生きる人を育てん」という教育目標の下、1965年、三重県上野市に日生学園高校（現・第一高校）を設置。80年に第二高校（三重県白山町）、83年に第三高校を設立。第三高校には英国パブリックスクールスタイルの三つの寮を設け、生徒全員が生活を共にし、切磋琢磨する環境を整える。

設立
1983（昭和58）年

形態
全日制／普通科／男子／全寮制

生徒数
1学年約180人

10年度入試合格実績（現浪計）
私立大は、早稲田大、中央大、同志社大、立命館大、関西学院大、関西大、東洋大、龍谷大、京都産業大、近畿大、甲南大、神戸薬科大、大阪経済大などに延べ72人が合格。

住所
〒671-2131
兵庫県姫路市夢前町戸倉566

電話
079-336-3333

Web Site
http://www.nissei.ac.jp/daisan/

変革のステップ

背景
◎20年程前、不登校経験のある生徒の可能性に着目し、積極的な受け入れを開始。社会で生き抜く力を付けさせる活動も始動
STEP 1

実践
◎豊富な行事で自己肯定感の向上と、日々の小テストで基礎学力の定着を図る。手厚い支援で生徒の不安定な心をケア
STEP 2

成果
◎再び不登校になる生徒が10％から2～3％に減少。難関私立大合格者が2桁となり、2年連続で京都大に合格
STEP 3

不登校の生徒の可能性を引き出す

日生学園第三高校は姫路市北部にある全寮制の私立校だ。小・中学校時代に不登校を経験した生徒が、全校生徒の半数を占める。不登校経験者を積極的に受け入れるようになったのは、20年前、ある生徒との出会いがきっかけだった。

その生徒は、中学時代に不登校を経験し、知り合いのいない高校で心機一転やり直すために同校を選び、入学した。感受性が強く、他の生徒が気付かないことに着目し、一つのことをとことん突き詰める性格だった。時に歯止めが利かなくなることもあったが、教師が支援して学習に向かわせたところ、予想以上の伸びを見せ、教師を驚かせたという。進路指導部主任の松本利寿先生は次のように話す。

「感受性が強すぎるあまり体調を崩したり、人前に出られなくなったりして、不登校となる生徒は多くいます。しかし、そうした生徒は、物事に対する洞察力や学習能力に長け、自信が回復さえすれば潜在的な力を大きく伸ばすことがよくあります。彼らの可能性を引き出し、自立への道筋をつけることも、学校教育の大切な役割だと考えています」

以来、「学校生活をやり直したい」という生徒を受け入れ、学園全体で約2500人に上る不登校経験者を社会へ送り出してきた。

入学後1か月の指導で生徒の居場所をつくらせる

同校が不登校経験者を受け入れるに当たり、最も配慮するのは入学後の1か月間である。入学当初は生徒同士のコミュニケーションがほとんどなく、教室は静まり返っている。入学直後にはどの学校でも見られる光景だが、同校の場合、入学オリエンテーションが終わり、教室に帰っても、生徒同士の会話はほとんどない。中には、「家に帰りたい」と泣き出す生徒もいるという。1年生担任の迫畑裕之先生は、入学当初の指導の重要性を次のように説明する。

「入学後の1か月で友だちが出来るかどうかが、生徒が学校になじめるかどうかの大きな分かれ目となります。人間関係を築けなければ、高校でも不登校に陥ってしまう場合があるからです。そのため、私が最初のLHRで最も重視するのは、生徒同士のコミュニケーションが活発化するよう促すことです。生徒同士をペアにしてインタビューゲームを行い、趣味や好きなことについて語り合う機会を設け、友だちの輪が少しずつ広がるように配慮しています」

次の関門は、5月の連休明けと夏休み明けだ。生徒の中には、長い休みの間に不登校時代の生活サイクルに戻ってしまい、休みが終わっても学校に足が向かなくなる者もいる。予防のために教師が家庭訪問を行うが、それでも学校に来られなくなった生徒にとって頼りになる存在は、クラスメートや部活動、寮の先輩である。

「生徒は自分自身が不登校を経験しているだけに、友だちや後輩のために何とかしたいという気持ちを強く持っています。教師が声を掛けるよりも、生徒が声を掛ける方がはるかに効果があります」（松本先生）

友だちと一緒だからこそ、集団生活の困難さも乗り越えられる。その苦労を一つひとつ乗り越えることで、生徒は徐々に自立へと向かっていくのである。

日生学園第三高校
松本利寿 Matsumoto Toshihisa
教職歴24年。同校に赴任して22年目。進路指導部主任、3学年主任。「手厚い指導により生徒の隠れた個性を発掘していきたい」

日生学園第三高校
吉田元彦 Yoshida Motohiko
教職歴16年。同校に赴任して4年目。教務部主任。「機を見るに敏」

日生学園第三高校
迫畑裕之 Sakohata Hiroyuki
教職歴・赴任歴共に4年目。1学年担任。「『出来るまでやる』徹底した指導を心掛けたい」

日生学園第三高校
米倉正朗 Yonekura Masaaki
教職歴・赴任歴共に1年目。3学年担任。「生徒と一緒に歩んでいきたい」

人前で表現する体験が生徒の自信を生む

同校では生徒一人ひとりに活躍の場を与え、自己肯定感を高めることも大切にする。例えば、文化祭に類する行事は年6回設けている。教務部主任の吉田元彦先生は、その意義を次のように語る。

「スピーチや演劇、クラブの発表、ディベート、クリスマス会など、どの生徒にも1年間に必ず1回は人前で表現する機会を設けています。最初は人前に出られない生徒もいますが、そうした生徒にはまず裏方の仕事を任せ、次の行事で人前に出る役割を与えています。学校で自分の居場所を見つけることが、何よりも重要です。その後、少しずつ『自分らしさ』を発揮させていくのです」

特徴的なのは、必ず演劇を取り入れている点だ。松本先生は次の点を強調する。

「不登校経験者の中には、自分自身を嫌い、受け入れることを拒む者がいます。彼らにとっては、まず『他者』を演じることが人前で自分を表現するための第一歩になるのです。そして、そうした生徒にとって、一つのことに一生懸命に打ち込み、他者から認められるという経験こそが何よりも大切なのです」

毎日の小テストで基礎基本の定着を図る

教科指導では、中学校段階の学習内容が定着していない生徒が多いため、基礎・基本の復習を何よりも重視する。その際にも配慮が必要だと松本先生は語る。

「高校生になって、心機一転を図ろうと考えている生徒に小中学生向けの教材を渡すと、意欲を削ぐことになりかねません。学校に通えなかったことを引け目に感じている生徒が多いだけに、プライドを傷つけないように、高校の学びとつながる形で『学び直し』をさせる必要があるのです」

学び直しの中心となるのは、英語の小テスト「DMTプログラム（＊1）」だ。毎日の朝学習で15分間、英単語を中心とした50問に取り組み、担任が即日採点を行い、不合格の生徒は放課後に追試を受ける。1年生では中学校の復習から始まって徐々に高校の内容を増やし、3年生では大学入試を視野に入れた英文法に取り組む。地道な学習の積み重ねにより、生徒の英語の偏差値は3年間で平均15ポイント伸びるという。

国語、数学、英語では、ほぼ毎時間の授業で小テストを行う。2年生以降は理科と地歴も加わる。出題内容は前時の復習が多いが、教科によっては独自のテキストを使い、その中から出題する。

1年生の初期段階では、学習内容の定着もさることながら、自習の習慣付けにも重きを置いている。年度初めに各教科のテスト範囲や回数を提示してもらい、進路指導部と教務部が必要なテストかどうかを精査する。生徒に過度の負担がかかるのを防ぐと共に、特定の教科に偏った学習にならないようにするためである。

また、生徒の細かい変化を見逃さないため、小テストの成績や、基礎学力と共に力を入れている読書量をクラスごとに毎日集計するなど、日々の学力の変化を確認して、教師全員で共有している。

頻繁なクラス替えで生徒の学力の変化に対応

年に複数回のクラス替えを行うのも、同校ならではの取り組みだ。不登校の経験があるために学びが抜け落ちており、入学当初に生徒の学力の変動を予想することが難しい。クラスを1年間固定してしまうと、生徒の急激な学力変化に対応できなくなるからだ。

同校は1学年4クラスで、習熟度に応じて、1組（特進クラス）、2・3組（進学クラス）、4組（総合クラス）に分けられる。入学時点では入試の成績でクラス編成をするが、4月末にはスタディサポートの国語の成績により最初のクラス替えを行う。以後、中間考査、期末考査、模試、その他必要に応じてクラス替えをする。その回数は、年7回以上となる。吉田先生は次のように説明する。

「4月に国語の成績でクラス分けをするのは、国語がすべての教科の土台になることと、他教科に比べて不登校経験が原因となる学力の差が小さいからです。中には、中学校にほとんど通っていなかったために、英語や数学の基礎学力が付いていない生徒もいます。しかし、入学時は低い成績でも、勉強すれば短期間でぐんぐん伸びる生徒もいます。入学時は4組だった生徒が、わずか半年で特進クラスの1組になることもあるのです。刻々と変化する生徒の学力に対応するために、柔軟なクラス編成が欠かせません」

クラス替えといっても、生徒全員を入れ替えるわけではなく、成績に応じて数人単位で移動するだけだ。それでも、入学後の1か月で2割もの生徒のクラスが替わる。2年生では各人の学力がほぼ固定するため、クラス替えの回数は減るが、それでも年2、3回は行うという。

習熟度が伸びず、他クラスへと移動する生徒にはじっくり話をする。「進学や総合のクラスで頑張りたい」「特進クラスでもう少しもがいてみたい」など相談し、納得した上でクラスが替わるため、意欲が下がることもない。伸びしろの大きい生徒たちだけに、教師には生徒の変化に対する柔軟性や即応性が求められる。

＊1 Daily Master Test プログラムの略称。基礎・基本の学習を徹底してマスターすることを目標とした学習プログラム。朝の小テストと授業内の小テストから成る

寮のチューターが生徒の悩みを受け止める

手厚い学習指導や多彩な学校行事により、数か月で教室は見違えるように活気を見せる。しかし、生徒が明るい表情を見せるようになっても気は抜けないと、吉田先生は話す。

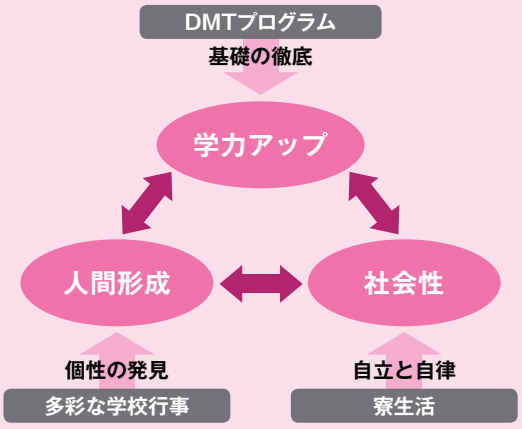
「成績が順調に伸び、クラスで居場所を見つけ、生き生きと学校生活を送っていたにもかかわらず、少しのきっかけで再び気持ちが沈んでしまう生徒もいます。担任や各分掌、各寮の担当教師と密に連絡を取り、生徒の変化を素早く察知するように努めています」

チューター制も、日々の生徒の状況を把握したり、ストレスを感じる生徒が息抜きをしたりする上で欠かせない。同校には三つの寮があり、それぞれ4人の教師がチューターとして配置されている。週2回は寮に泊まり込み、生徒の自学自習を支援したり、相談に乗ったりしている。特に、若手教師は生徒の良き相談相手となる。教職歴1年目の米倉正朗先生もその一人だ。

「一番多いのは人間関係についての相談で、朝の3時まで話を聞くこともあります。相談を受ける際に心掛けているのは、あれこれ助言するのではなく、生徒の話にひたすら耳を傾けることです。話し終えた後の生徒のすっきりした表情や、悩みを乗り越えて学校で元気に活動している姿を見ると、私自身、救われたような気持ちになります」

手厚い支援が必要なのは、生徒だけではない。不登校経験は、生徒だけでなく保護者の心も敏感にさせる。全寮制ということもあり、入学当初は担任が頻繁に保護者へ連絡を取り、生徒の状況をこまめに伝える。特別なことがなくとも、最初の1か月は全生徒の家に現状を報告する。

図 日生学園第三高校の教育



＊学校資料を基に編集部で作成

再不登校率は2%に減少 次なる目標は生徒の進路実現

不登校の受け入れを始めてから20年。当初は、指導のノウハウが蓄積されていないこともあり、再び不登校となる生徒が10%ほどいたという。現在は、教師のきめ細かな支援が実り、不登校に再びなる生徒は2～3%に減少した。ほとんどの生徒が同校で自信を取り戻し、新たな一歩を踏み出していくのである。生徒たちが成長していく姿ほど教師に勇気と元気をもたらすものはないと、迫畑先生は強調する。

「入学当初は泣きながら勉強していた生徒が、文化祭や卒業式で雄弁に語っているのを見ると、3年間でこれほど成長するものかと感動を覚えるとともに、生徒の潜在的な能力の高さに改めて驚かされます。教師は少し背中を押しただけ。不登校という本人にとって辛い経験を乗り越え社会のリーダーに飛躍してほしいと願い、送り出しています」

大学進学率は大きく向上した。以前は関関同立（＊2）の合格者はゼロだったが、ここ5、6年は30人前後が合格。国公立大は2009年度入試では10人以上が合格し、08年度、09年度と2年連続で京都大に合格者を出した。将来的には関関同立に70人合格が目標だが、「進学実績だけがすべてではない」と松本先生は強調する。

「以前は大学に入っても、居場所や目標を持てず中退してしまう卒業生がいました。何より大切なのは、生徒が進学後にミスマッチを起こさず生き生きと大学生活を送ることです。社会で生き抜く力を十分に付けさせて送り出すことが本校の使命であり、そのために教師の指導力を高めていきたいと思います」

＊2　関西大、関西学院大、同志社大、立命館大の総称

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年9月号指導変革の軌跡「埼玉県立上尾鷹の台高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）